2 月 18 日のメッセージ

聖書：マタイによる福音書　4：1－11

「主を試してはならない」

2 月 14 日からレント(受難節、四旬節)に入りました。今日から 6 週間、日曜日ごとに、イエスの十字架への道行きをたどる旅が始まります。イエスの旅路は荒れ野の誘惑から始めていくのが一般的です。ところが、4 つの福音書の中では唯一、ヨハネによる福音書にはその記述がありません。だから、ヨハネに聞いていく 4 年サイクルの D 年では、マタイの物語から誘惑について知ることになります。

私たちは何度もこのイエスの誘惑の物語を聞いているので、「悪魔の誘惑とはこんなものだ」というイメージができあがっているのではないでしょうか。けれども、今は、その枠を一度取り払って、「悪魔の誘惑」をイメージしていただきたいと思うのです。

あなたにとって「悪魔の誘惑」とは何でしょう。食べてはいけないお菓子を食べてしまうこと。緩めてはいけない財布のひもを緩めてしまうこと。あるいは、見てはいけないお隣の答案を見てしまうこと。誘惑を数え上げることが難しいくらい、本当にたくさんの誘惑があることを改めて思います。

では、これらの誘惑に共通しているものは何でしょうか。一見すると全く違う誘惑のように思えるものたちには共通点があります。それは、自分の心の奥底にある欲望を満たす、ということです。おいしいお菓子を食べたい。欲しいものを全部手に入れたい。何とかしてでも試験に合格したい etc.。気合いで押さえ込んでいる私たちの弱さをくすぐるのが誘惑なのです。

さて、イエスにとっての誘惑とは、やはり「自分が神の代わりとなる」ことでしょう。悪魔は聖書の言葉を用いて、その欲望が神の前に正当であると誘ってきます(「『神があなたのために天使たちに命じると、／あなたの足が石に打ち当たることのないように、／天使たちは手であなたを支える』／と書いてある。」マタイによる福音書 4:6＝「主はあなたのために、御使いに命じて／あなたの道のどこにおいても守らせてくださる。彼らはあなたをその手にのせて運び／足が石に当たらないように守る。」詩編 91:11-12)。

「イエスは、『「あなたの神である主を試してはならない」とも書いてある』と言われた。」(マタイによる福音書 4:7)

神を試すことはすなわち、神を信じていないことを示しています(「彼は、その場所をマサ（試し）とメリバ（争い）と名付けた。イスラエルの人々が、『果たして、主は我々の間におられるのかどうか』と言って、モーセと争い、主を試したからである。」出エジプト記 17:7)。信じていないのですから、当然、委ねることもできていません。委ねられていないのですから、独り相撲を取って誘惑に負け、また失敗を繰り返すことになるでしょう。だから、神を試してはならないのです。

もう一つ、ここで大切なのは、イエスが聖書の言葉を用いて悪魔に立ち向かわれていることです(「あなたたちがマサにいたときにしたように、あなたたちの神、主を試してはならない。」申命記 6:16)。それは、聖書の言葉は文字として書かれているだけでなく、生きた神の言葉として、力ある神の言葉として語られていることを示しています(「神の言葉は生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、精神と霊、関節と骨髄とを切り離すほどに刺し通して、心の思いや考えを見分けることができるからです。」ヘブライ人への手紙 4:12)。

自分の力だけで誘惑に打ち勝つのは本当に難しい。それゆえ、神に委ねて、神と共に誘惑と向き合う必要があることをイエスは教えてくださっています(「わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、……わたしたちと同様に試練に遭われたのです。」ヘブライ人への手紙 4:15)。だから、その教えに従って、私たちは今日も聖書の言葉に聞くのです。「また同じ話だ」と飽きることなく、何度も繰り返して聞くのです。

それはひとえに、あらゆる角度から、あらゆる手段を用いて迫ってくる誘惑の一つひとつに立ち向かうためです。同じように見えて常に新しく迫ってくる誘惑と向き合うために、私たちは聖書の言葉に学び、神の言葉にすがっていくのです。